
番外短編集

モト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

番外短編集

【Nコード】

N4974N

【作者名】

モト

【あらすじ】

(イステイナ)の番外短編集です。

本編：<http://ncode.syosetu.com/n2866g/>

SEVENTH HEAVEN STIGMA (前書き)

本編時間軸からさかのぼること9年前、セラナと師父が出会って1年位経った頃の話です。

間違いが多いなーとおもったら原稿を一稿前の物を間違ってコピーしてしまっていたらしく、修正いたしました。

SEVENTH HEAVEN STIGMA

彼はただ、とある一軒の店の前で啞然と立ち尽くしていた。何度か手に握りしめた紙と周囲を見回して再度その小さな建物を見る。彼の見上げる視線の先には実にカラフルで、彼の感性から言わせると「ふざけている」看板があり、癖のある読み難い字（飾り文字なのかもしれないが）で『TATTOO Succubus』と書かれており、さらにその文字が派手派手しいピンク色だったりする。彼はもう一度手にした紙とその店名を見比べて、そうして何かを諦めたかのように溜息を吐いた。

彼は名を泉瑞月と言った。歳の頃は中年と初老の間くらいだろうか、長く背に垂らした白髪交じりの髪と珍妙な衣装（どこぞの国の民族衣装か）の所為で悪目立ちするらしく、往來を行く人からチラチラと奇異の目で見られていたが本人自体は特にそれを気にしている様子もない。彼自身はそれらの類の視線について、あくまで、こんな変わった店の前に自分の様な若くない人間がいる事が珍しいのだろうと思っていた。

彼は一つ息を吐くと意を決して店の扉を開いた。ドアベルの澄んだ音が響き渡る店内は薄暗く、奇抜なインテリアが所狭しと並べられていて、この店の主に商売をする気があるのか疑わしい。彼が一歩店の中に踏み込むと彼の背後で木製の扉が軋んだ音を響かせて閉る。するとただでさえ薄暗い店内はさらに暗さを増し、天井の明り通りの窓から差し込む光の筋が空間に舞う埃を映し出した。

「…………留守か？」

誰に言うでもなく呟いてみる。店内を歩き待合い用の物と思われ

るソファ―に腰を掛ける。スプリングが壊れかけているのか思っていたよりも身体が沈み込み、彼は慌てて背もたれに手を突いた。埃が舞い彼は軽く咳き込む。すると、店の奥の方から凄まじい物音がした。

「ああ〜！ はいい、はいはあい、ちよつと、ちよつと待っていてくださいねえ〜。」

甲高い少女の声がして、ガシヤガシヤと何かを掻き分ける様な音が続く。瑞月はその音を聞きながら声の主が現れるまで店内を見回していた。自身の座っているソファ―は黄緑色のベルベット、ソファ―テーブルは所々欠けた丸い硝子テーブル、無造作に置かれた動物を形どった木彫りの置物と怪しげな観葉植物、壁面の棚には種類やサイズなど気にせず並べられた書籍、店と私室が繋がっているのか奥の方にはキッチンがあり流し台と思しき場所には山のように食器類が置かれていた。天井に張られたワイヤーには洗濯物が干してあり中にはカラフルな小さな下着などもあって、彼はあまり見ているのも悪い気がして眼を逸らした。五分ほど待っていただろうか、彼が店の細部にわたる観察にもいい加減飽きて来た頃、再び店の奥から今度は半ば泣きそうな声が聞こえて来た。

「ううう… た、助けて下さいい…。」

「やああ、助かったです、どもども」

瑞月が声を頼りに行くと、モゾモゾと動く沢山の本や雑誌…に衣類が混じった物が有って、彼がそれらをどけてやると中から声の主がひよっこりと姿を現したのだが…、彼女は見た目で言えば十

二歳位、派手派手しくピンク色に染めた長い髪は毛先の方が外に撥ねている。彼女は照れ臭そうに「てへへ」と笑うと跳ね起きて両手を払った。

「助けてくれたのには大感謝なの。でも今日は定休日だよ　店の前に書いてあったでしょ？」

「定休日？　聞いてねえよ。俺は逆にこの日しかやってねえって聞いたから来たんだが……。」

瑞月は偉そうに腕を組んで仁王立ちをして立つ少女に悪態を吐く。

「いいから店主を出しやがれ。俺は店主にしか用はねえよ。」

彼が言う少女はきょとんとした表情で瑞月を見つめ言った。

「今日しかやってないって、それ誰に聞いた情報？　ってか私が店主だしっ？」

「天狐御大姉瀬織津姫（ティエンフーユーダーズーライジーヂンチエン）だが……天狐の紹介で来たと言えば話が通っていると聞いているんだがな。だから悪い事言わねえから店主出せよ、それとも留守か？」

「大姉の紹介って……ああ、最近ポスト開けて無かったからなあ……ってだからあ私が店主だってばあ！」

「痛っ、てめえ！　髪引つ張るんじゃないやねえ痛むだろうが！！」

少女の話を聞こうとしない瑞月に業を煮やしたのか少女は彼の後ろ髪を思い切り引つ張った。それに対して文句を言う瑞月に対して「そんな事ばかり言ってるのと施術してあげないんだからねっ」とぶつぶつ溢しながら床に散らばった本や雑貨を飛んで避けながら先程彼の入って来た入口の扉に突いている小さな引き戸を引いた。

すると彼女の足元にどざどざと大量の封筒類が散らばる。しゃがんでそれらの中から目当ての封筒を探す彼女に対して「おい、それ何日分だ？」と呆れて漏らす瑞月の言葉を見無視して彼女は一通の封筒を無造作に破り中の手紙に眼を通し「ふむふむ」と頷いていた。

「本当だつ。ゴメンね！ 名前読めない君」

チユルエン・ルイユエ
「泉瑞月だ！ てめえみてえな小娘に“君”とか言われたくねえんだよ！！」

「セラナや、セラナ。またここにおったのか。」

セラナ、と呼ばれた少女は徐に振り向いた。白銀に煌めく髪が彼女の動きに合わせて煌々（きらきら）と揺れる。分厚い本を抱えた彼女が居たのは、書庫といっても大袈裟で無いほど大量の本が整然と並べられた部屋である。天狐は少し虚ろなセラナの瞳を、身をかがめて覗きこみ、その華奢な肩を抱きしめてやった。天狐の赤い豪華な着物に小さな少女は半ば埋もれる様な形になる。

「お主は本が好きじゃの。」

「……。」

少女は天狐の問いかけに対して無言であつた。ただ虚ろな瞳を巡らして彼女の顔を覗きこむ。

「ん？ 瑞月か？ 瑞月はのう暫く戻つて来ぬよ。」

天狐が彼女の意を汲んで告げるとセラナはふいと視線を逸らす。そうして腕の中から抜け出すと再び書の活字を追い始めた。

「見かけによらず意固地じゃのう。まあ、よいよい。今暫しわらわが汝を預かり見るが、案ぜよ、瑞月は必ず戻るて、わらわが保証するでの、これは確証じゃ。」

彼女は物言わぬ少女の背中に告げ、そうして部屋の扉をそつと閉めた。

「なるほどねえ。それで力が欲しい訳ね？」

少女は瑞月の向かいのソファーに足を組んで座り、手紙に眼を通して言った。

「ああ。」

「どおりで普段は若者好みのお洒落タワー専門店のこんな店におつさんみたいなおつさんが来るなんてちょっとおかしいな、この人キ印さんかな？ 着てる服も頭おかしいしって思ってた所だよ」「ほう、てめえには言われたくねえがな。」

瑞月は平らな視線で少女を見つめながら言った。少女はエナメルのホットパンツ、胸が隠れる程度の丈の短いシャツとベストに編み上げの皮のブーツといたいたいでたちであり、白い太腿や腹のラインが露わではあったが彼は全くと言って言いほど彼女に対して色気を感じられなかった。

「了解 了々、他ならぬ大姉の命ならば受けない訳にもいかないからあ？ 個人的にはおっさんに施術するのはあ趣味じゃないんだけど、仕方ないからしてあげるね」

「……………」

瑞月は少女の歯に衣着せぬ物言いに閉口した。否、もう突っ込む事すら面倒になって「はいはい、お願いします。」と言って頂垂れた。

「じゃあ、改めましてえ、私、ファンクアン黄管………シャオファン小黄つて呼んでよね」

少女： 小黄は言うてにっこりと笑って見せた。彼女は笑うと八重歯が覗く。

「おじさんは『龍』なんでしょ？ 力だったら充分に持っていると思うけど、なんでそれ以上に力が必要なのかなあ？」

『龍』とは、世界全体の無意識的自己防衛の為に力を与えられた存在だ。『龍』として指名された者はそれぞれの使命を負っている存在の事を指す言葉だった。彼は『龍』であり、使命を負った存在として、この星の全ての命の源であるところの核の管理人たる天狐によって、常人ならざる力を与えられている。

「…今のままでは俺の敵にはどうにも勝てそうにない気がする。」

瑞月は膝の上で組んだ手を握り締めて言った。

「“あの人”の事？」

彼の言葉に小黄が同意する。

「知っているのか？」

「知っているも何も… 彼女と私はトモダチだし？ それに“あ

の人”はある意味私の恩人だからあゝ

そう言つて小黄は再び八重歯を覗かせて笑つた。

「このままでは、俺はセラナを殺せない。」

その日は雨が降つていた。美しい新緑に彩られた庭園はしつとりと艶やかに濡れて、普段とはまた違つた姿を見せている。軒下で庭を眺めていた天狐の背に向かつて瑞月は苦々しくそう言つた。天狐の膝の上には少女が頭を乗せてスヤスヤと眠つていた。少女の肌は陶器のように真っ白で、薄く朱のさした頬や、それに影を落とす長い睫毛、儂げな印象が美しい。天狐は彼女の頭を撫でながら彼のその言葉に振り向く。

「逆子の主がわらわの元にふらり現れたと思えば強請り事とはの。」

「……。」

瑞月は彼女のその言葉に黙つて俯いた。しかしながら彼には分かつていた。どうしようもなく今の自分では、自分が背負つた宿命の対象である“彼女”には敵わないという事、そうして“彼女”を内包するが故にヒトとして壊れてしまった少女を手に掛ける事など出来そうにないという事を。

「ふん、以前の主であれば迷わず手を掛けていたろうにのう。歳か？」

「かもしれん。とにかく俺は「魔素」を扱えん。だが奴は「魔素」を使う。使うというかそのものか……あちらの世界の理を熟知した奴に対してこちらの世界の理の一端を知つた位の俺ではとてもじゃ

ないが勝てそうにない。」

唸る瑞月に対して天狐は長い黒髪を揺らしながら笑い、そうして言った。

「では、「召喚陣」でも彫るかの。」

「あの人」に対抗するとなるとでも結構難しいよう？」

小黄は無邪気に言う。

「なんてったって“あの人”はあの世界では一番力を持っていたからねえ…それに相性もあると思うし… ああ、ところでおっさんは「召喚陣」ってお分かり？」

「良く知らん。」

即答する瑞月に対して小黄は大袈裟に溜息を吐いて見せた。

「あのねえ、この星で皆さんが「魔素」なあって呼んでいるアレは元々は他の世界から来た情報伝達物質って感じの物な訳。だからそこから情報を引き出して、あるいは情報を書き出して命令する事によつて所謂「魔術」たとか「奇術」って呼ばれている現象がおきるんだなあ。でね、それらの力を引き出す為にはフツーはイメージというか、「魔素」と接続できる人間がそのイメージを伝える事で引き出している訳だけども、「召喚陣」っていうのはもつと直接的なのよう、これは「魔素」に対して語り駆ける所謂文字みたいな物なんだなあ、だから「魔素」と接続できない人間でもこれを使えば「魔術」が使用可能になるわけ。上手く似通った個性を持つ「魔素」

を集める事が出来れば、それそのものの姿を召喚出来る事もあるけど……。」

「まあこんな危険な施術は大姉の推薦が無いと滅多にしないけどねえ。」などと付け足しながら彼女はペラペラとカタログのような物を捲っていた。

「うーん、これかなあ、これが多分最強だなあ、でも上手く力が働いてくれればいけど。」

彼女は言いながらカタログのページを指差して言った。それは七つの要素で構成された陣だった。

「何でも良いさ。やってくれ。」

瑞月が言うと小黄は眼を剥く。

「え、ええと……この手の陣って、普通のタタワーと違って凄い痛いよ？ 大の男が泣いてゲロ吐いて魔されて死ぬほど痛いよ。それにコレ、このデザイン見て！ 七つの要素があるでしょ？ コレ、『高き塔の王』っていう構成陣なんだけど、あれだよ、陣一個定着させるのに七日かかるんだからね。つまり四拾九日かかるよ？ 分かる？ 四拾九日だよ？！ その間私店開けないんだよ？！ どうしろつづの。」

「知るかよ！ 何でも良い兔に角力の強い奴に越した事はねえ。」

「ふう〜 じゃあ、判った。大姉の推薦もあるしね、それに大姉手紙の中に「死んでも良い」って書いてたし、もしシヨック死されてもお小黄の所為じゃ、ないよね。」

「……なるべく死なない方向性で頼む。」

冷や汗を浮かべながら言う彼に対して小黄は顔の前で人差し指を振って見せた。

「だめだめん　　小黄にも余裕ないもん、じゃああ、コレ、してね？」

「……何を?!」

小黄に至ってでナチュラルに手錠をかけられて瑞月は慌てて手を振った。だが彼の力を持ってしても分厚い鉄製の手錠はびくともしない。それは鎖で天井の梁に繋がっており、彼はたちまち全く身動きが取れなくなってしまった。

「暴れられるの防止でえっす」

彼女は慣れた手つきで彼の帯を解く。たちまち彼は上半身を剥かれてしまった。

「ほっほお、歳の割には良い身体してんじゃん」

小黄は楽しそうにキャラキャラと笑うと彼の膝の上に跨る。

「……あ?」

訝しげに見上げる彼に対して彼女はにっこりと笑って言った。

「よし、とりあえずセックスしよう!」

「……しねえよおおおお!!」

「あだっ」

瑞月の膝蹴りによってバランスを崩した小黄は無残にも顔面から

床に滑り落ちた。

「いったあい、何するのかな？ ぶーぶー」

「ぶってんじゃねえよ！ 何でてめえとナニをせにやなんのだ？」

「うう、ちよつとしたオプシヨンみたいなあ。」

「断る。」

「じゃあ報酬でいいからあ。」

「願い下げだ！ 金払うわ！！」

「なんだよお、大姉の話だとお、おっさんロリコン だつてえ…。」

「

「何だよそれ、聞いてねえよ！ ざっけんじゃねえ、あの糞アマ！

てめえもまたマウント狙つてんじゃねえよ?! 施術は背中だろ

?! 前は関係ねえだろうが?!」

「ぶう〜しつかたないなあ じゃあ御望み通り、ていつ」

小黄が天井からぶら下がったロープを引くと瑞月の両腕が上に持ちあがる。小黄色は様々な器具の乗ったワゴンを引いて彼の後ろ側に回り、アルコールで背を消毒する。丹念に脱脂綿で何度も拭いながら彼女は足元のペダルを踏んだ。すると今度は床から分厚い板が彼の目の前に垂直にせり上がって来る。

「はあい、じゃあその板にしがみついてて下さいねん」

彼女はすでに自由を奪われている彼の両腕を拘束具でその板に固定し。さらに肩をベルトで固定した。それにより彼は全く上半身の身動きが取れなくなった。

「くすぐったくても動かないでねえ」

彼女が言つてすぐさま瑞月は背面にむず痒さを感じた。撥ね退け

てやりたかったが、動きたくとも動けそうにない。小黄が陣の下書きを書いているのだろう、筆を走らせながら彼女は彼に語り駆けて来た。

「おっさんはさあ、元々人間なんですよ？」

「何だ？」

「普通人間って『龍』には向いてないっていうか、選ばれないじゃない？ ほら人間って魂の本質的に命の源に戻りやすいからさあ……。『龍』って天地天命悉くと乖離しちゃっている魂なんですよ？」

「……。」

「戻れなかったってことは、おっさん、何か相当やらかしちゃった系でしょ？」

「……。」

瑞月が黙っていると小黄は（いつの間に掛けたのだろうか）眼鏡を直しながら更に言葉を紡ぐ。

「大姉の逆鱗に触れたって事だよなあ…… まあ、御百度返し（御霊返し）って所かな」

御百度返し…… 魂が一個として固有の自我を持つそれよりも以前に命の源に突き返す行為、たとえば妊婦や生後一週間に満たない赤子を百人手に掛ける事を陰にそう言う事がある。瑞月の無言を肯定と受け取ったのか気にせず語り続ける。

「そりゃあおっさんが悪いよ。つか趣味悪い」

「……。」

「まあ、精々働いて大姉に赦して貰えるといいねえ 七つ陣、かつて巫女を支えし忠臣の力を引き出す相、力としては巫女と互角か、

しかし彼の敬愛していたその巫女本人を相手に使用するので実際使
い物になるかはさておき… 七つ陣とおっさんで八卦、六拾四卦に
因んでこの世のすべての力を引き出してみせますよん さっきも
言っただけど、一つの陣の定着までに七日七晩、七つ陣なので四拾九
日の苦悶でも受けちゃって、罪滅ぼしとでも思ってたさあ」

小黄はタオルで手を拭い瑞月の表情を覗きこんだ。仏頂面で黙り
こくったままでいる彼に対して苦笑いを浮かべ再び作業を続ける。
暫し無言の時間が流れる、時計の針の音ばかりが部屋にはこだまし
ていたが、いくつかの音が重なって（部屋にいつたい何個時計があ
るのやら）いたために、瑞月には正確な時間が判らなかった。

彼は自分の背後で小黄がふうつと溜息を吐き、額を拭うのを感じ
た。振り返りたくとも振り返り用が無いが、どうやら下書きの作業
は終わったらしい。

「あゝ、いつか彼からマウントポジション奪って締めて逝かしてや
りたいナ」

急な彼女の発言に、瑞月はやっと声を発する。

「どつちの意味だ？」

「何それ野暮？ ダサーイ！」

「アホか？」

「アホじゃないもんっ！ 好奇心旺盛なだけだあ？」

「痴的好奇心か？」

「上手い事言っただつもりか？ 馬面不細工デコハゲロリコン野郎」

「ちよつと待て、ハゲは取り消せ、それからロリコンもだ。少なく
とも俺はお前相手じゃ勃つものも勃たねえ。」

「はいはあゝい、そんじゃあ早速掘りますよお、勝手に動いたら殴

るよお〜蹴るよ〜しばくよ〜逝かすよ〜。」
「……この状態じゃあ動けねえだろうが。」

この状況に愚痴を溢す彼を余所に小黄はインクを付けた針を構えて満面の笑みを浮かべていた。

「はきゆう〜ん 言わずもがなだけども、どっちかっていうとおっさんの自尊心が傷つく方ね？」

「…… いいからとつと始めてくれ。」

「はいはあ〜い、すつごく痛いから泣いちゃってくれちゃってねっ」

「……………」

それから一月半以上の月日が流れた。天狐の元を瑞月が彼女を置き去りにして去ってから丁度五十日目に、彼は帰って来た。糞やっれて、不老の筈であるにも関わらず白髪を増やして帰って来た彼に対して出迎えた天狐は「どうであつたか？」と問うた。すると瑞月はげっそりとした表情で視線を漂わせながら「全ては完了した。」と告げた後、そのままがつくりと項垂れ言った。

「力を手に入れた代わりに色んな大切なものを失った気がする……。」

「主にしてはセンチメンタルな事を言うのう。殊勝な事じゃ。」

「いや、動くなつうのは解る。痛みと痒みが酷えつていうのも解る……が、まさかあんな小娘に拘束されてあんなことやこんなことをとされるなんて……………」

「…………… まあ死ぬ奴も多いから死ななかつただけ小黄の腕が良かった

って事で落とし前をつけてくりゃれやのう……。」「

両手を突いて屈辱的な記憶にのた打ち回る彼に、半ば引いた視線を投げ掛けながら天狐は彼の頭を撫でてやった。

「おお、よしよし逆子とはいえそうしおらしくなっておれば、そなたもそれなりに可愛らしいのう。そなたに見てもらいたいものがあるぞ、これ……。」「

そう言つて彼女は両手を叩いた。暫くすると衣擦れの音を響かせながら一人の少女が彼等の前に現れた。少女を見て瑞月は思わず息を呑む。白い絹地に青い朝顔の花が散る、薄いグリーンの帯を身体の前で大きく縛り上げ、その上からさらに白の衣を纏っていた。白銀の髪は背に垂らしたままで、伏せがちの瞼を彼女は不意に持ち上げた。その双眼が彼の姿を捉えて大きく揺らいだ。真つ白な頬にさつと朱がさす。彼女は自分からは決して彼に近寄ろうとはしなかったが、どこか安堵したような表情だ。と天狐は思った。

「ほれ、だから戻ると言つたであらう？ お主は捨てられてなどおらぬよ。」「

天狐が言つとセラナは少し俯いてしまった。だが意を決したようにゆつくりと瑞月の元に歩み寄りさらに頂垂れた。

「よう、俺の敵。まだ生きてやがったか。」「

「……。」「
「……。」「
「……。」「

「てめえはまだ話せないのかセラナ。面倒だな……天狐の大姉は優

しくしてくれたか？」「

セラナはこくりと小さく首を縦に振る。彼はそういうセラナの頭を大きな手で掴む様に撫でた。するとセラナは更に俯いてそうして少しだけ笑う。そして小さな小さな声で一言だけ言った。

「…………おかえりなさい。」

そういった二人のやり取りを天狐は柔らかな笑みを持って見つめていた。それが例え重大な罪を犯した逆子であろうと、この世界を崩壊に導くかもしれない存在を宿していようと、彼女にとっては須らくこの世界の命は愛惜しいものなのであった。日の光が彼等を包んでいた。それは彼等を象徴するかのような柔らかな物だった。

FIN .

SEVENTH HEAVEN STIGMA (後書き)

よろしければご意見ご感想等お聞かせ下さい。今後の活動の参考とさせていただきます。8月29日コミュニティにて無料配布冊子様に書いた1本です。

SWEET SWEETS LESSON (前書き)

バレンタインもどき。ミコトとウイアドの短編です。内容はありていな感じ。

SWEET SWEETS LESSON

「はあ…。」

ミコトは頬杖をついて溜息を溢した。彼女のデスクの上は相変わらず様々な書類やデータで埋め尽くされており、ただそれらの全てが種類別にファイリングされ、所々に付箋が貼り付けられているあたりが彼女の几帳面な性格を表していると言えるだろう。

「はああ〜。」

彼女は再び溜息を洩らしてデスクの上で腕を組みその上に突っ伏した。本日彼女の仕える皇王セラナ・クロノワールは幕僚長を含めた上部議員達との議会に出席しており、彼の執務室にはミコトが一人残されていた。彼女の他にこの部屋にいる人物と言えば、皇王執務室付きの使用人であり双子のマエとミエだけであり、彼女たちは忙しそうに部屋の掃除や雑務をこなしていた。だがミコトの思わせぶりな溜息に彼女たちは掃除をする手を止めて彼女の傍に歩み寄る。

「どうしたのですか？ ミコト様。」

「御公務がお忙しいのですか？ ミコト様。」

口々に言う彼女たちにミコトはうつ伏せになったままで首を振った。マエとミエは互いに顔を見合わせ、そうして二人同時に首を傾げた。

「お紅茶をお持ちいたしましょうか？」

マエが言うと、ミコトはそこでようやく顔を上げ、そうしてこく

りと頷いた。

「美味しいわ、ありがとう。ミエ。」

「私はマエでございますわ、ミコト様。」

「あら、ごめんなさい、あなた達そっくりなんだもの……。」

「御気になさらずとも。如何ですか？ マーマレードを少し加えて見ましたが、御口に遭いますでしょうか？」

「ええ、とても。」

ミコトはうつとりと言って白いカップを揺らした。応接用のソファーにミコトと彼女の対面にはマエとミエが並んで座っており一緒に紅茶を啜っていた。立場上本来ならばそのように一緒にくつろぐなど赦されないことなのだろうが、歳の近い彼女たちは非常に仲が良かったし、それにミコト自身…否、セラナを含めてそういった事をあまり気にしない性質だった。

「それにしても、本当に美味しいわ。紅茶もそうなんだけど、マエとミエの焼いてくれたクッキーってホント、売れるわ、いいえ売り物よりも美味しく可愛いわ。」

ミコトは言ってクッキーをもう一つ手に取った。チョコとプレーンの市松模様のクッキーは歯触りは軽く、口の中に含めばさっと融けてしまう。

「お褒めにあずかり光栄です。」

マエとミエはそれぞれ言っにつこりとほほ笑んだ。しかしミコトが再びつかない表情を浮かべた為に彼女たちは困ってしまい互いに眼を合わせた。

「何か、御悩み事でしょうか？」

「私たちなんぞでよろしければ、差し支えなければ仰ってくださいまし。」

彼女達が口々に言うと、ミコトは暫く考えていたが、やがて恥ずかしそうにポツリと呟いた。

「明日は… 戴冠記念日ですわよね…。」

戴冠記念日… 現ヴァローナ皇王であるセラナ・クロノワールが五年前、戴冠し皇王としての地位を得た日でありヴァローナ国民にとっては祝日であった。慣わしとしてこの日はシロツメクサで花の冠を作り飾る風習があるのだが、若者たちの間では、男性はこの花冠を意中の女性に渡し想いを伝える… といったような愛の行事になっていた。何故かは不明ではあるが、おそらくは彼の戴冠式が行われる日は、本来ならば戴冠式と同時に幕僚長であるアダムが婚禮の儀を執り行うのではないかという噂があり（というのも、アルデアアナからヴァローナに皇族としてやってくるのは女性であるという噂が流布していた為なのだ。）実際は、男性だったので婚禮式など取りおこなわれる訳もなく戴冠式だけがおこなわれたのだが、この情報が何処かで混じり合って今の風習ができたのだろう、と言う事だ。さらにこの日、男性から花冠を手渡された女性は返答の代わりに甘いお菓子を手渡すという風習もあった。（これは製菓メーカーの広告の所為で広まった習慣だが。）

「ミコト様、どなたかから花冠を御受け取りになられたのですか？」
「まあミコト様そうなんですの？」

口を手を当てながらキヤアキヤアと言うマエとミエに対して「ち、違います！」と顔を赤らめて否定した。そうして小さく縮こまる様

に背を曲げて言う。

「その… クツキーの作り方を教えていただけませんか？」

一瞬、執務室を沈黙が満たした。マエとミエは互いに眼を合わせた後に二人同時に乗り出し口々に迫る。

「ただだ、誰にですかミコト様？ どなたがミコト様に花冠を？」

「アスラ様ですか？ それとも他の殿方ですか？」

「だから、違うの！」

ミコトが大きな声を出したため、マエとミエはビクリと肩を震わせて引きさがあった。

「違うの、貰って無い、貰って無いもん！ 貰って無いけど……あげたいの。」

ミコトの今にも消え入りそうな声にマエとミエは一瞬きよとんとした表情をしたが、納得したのかクスクスと笑った。

「だから、マエ、ミエ、忙しい中悪いんですけど、作り方をお教えたいただけませんか？」

頬を真っ赤に染めて言うミコトに双子の使用人はにこにここと笑いそうして言った。

「それならば、お兄様に聞いて下さいまし。」

「え？ クッキーの作り方ですか？ ええ、マエとミエに教えたのは私ですよ。」

言つてウイアドはミコトに微笑んで見せた。彼はこの執務室に仕える使用人の長を務めておりマエとミエの兄でもある。大人しい顔立ちにヘーゼルの甘つたるい瞳が笑っている好青年だ。

「私にもお教えいただけます？」

ミコトが言うと、彼は快く引き受けてくれた。

執務室にはいくつか扉があるが、その中でも一番入口に近い側に位置する扉を開けると、使用人たちが使う簡易的なキッチンがあった。簡易的とはいえ、普段セラナやミコトといったヴァローナ皇国において地位の高い人物が口にするものを作る場所とあつて設備はそれなりに整っている。ウイアドは手慣れた手付きでボールや泡だて器といった器具を取り出してステンレスの作業台の上に並べた。

「あ、これを付けてください。」

ミコトが彼の放った物をキャッチして広げて見ると、ピンクの可愛らしいエプロンだった。見ると同じ物をウイアドも付けている。

「いえ、私は普段こういふ事はしません故、マエとミエの物ですが、付けておいた方が良いでしょう。粉で制服が汚れてしまいます。」

ミコトの着ている制服は純白のものであり、たしかに少しでも汚れが付けば目立ってしまうであろう。ミコトも彼に倣つてエプロンを付けた。

「ミコト様は料理などの経験はおありでしょうか？」
「……いえ。」

ミコトは答えて顔を赤らめた。自分が女子らしいことがまったく出来ないと言っ事を見透かされた様で気恥ずかしかったのだ。ウイアドはにっこりと笑うと「では、絞り出しのクッキーにしましょうね。」といって材料を用意し始めた。

バター、グラニュー糖、卵、薄力粉、コーンスターチを作業台の上に並べ、最後に業務用の量りを取りだした。

「さて、では始めますよ。」
「は、はい！ お願いします。」

勢いよく頭を下げるミコトにウイアド思わず噴き出した。

「気合が入っていますね。」
「勿論ですわ！ あのお方に食べていただきたいんですもの！」
「……セラナ様ですか？」
「ウイアド！！ 始めるんじゃないんですか？！」

ウイアドの言葉が凶星だったのか、赤い顔を更に赤くし、甲高い声を上げるミコトを彼は可愛いなあと思いつつ、彼女の想い人に少し妬けた。勿論、彼にとって彼女の想い人は彼の主人であり、絶対に服従すべき相手なので、それを表情には出さずにただ胸の内に仕舞い込んで笑顔を作った。

「それではミコト様、材料を量りましょう。」
「はい！」

「こちらのトレイに薄力粉を70gとコーンスターチを40g量つ

て入れて下さい。」

「混ぜてしまつて構いませんか？」

「はい、合わせてふるいにかけますから。」

ミコトは几帳面に量り、ふるい器で粉をふるつた。慣れない彼女は粉を吸いこんで我慢が出来ずくしゃみをしてしまつ。白い小麦粉がキッチンに舞つた。

「ああ！ すみませ、ケホっ。」

「ミコトさん、それ以上咳き込むと……。」

狭いキッチンはあつという間に真っ白になつた。

「もう一度、量り直しましょう。お菓子は分量が命ですから……。」
「すみません……。」

そんなこんなで、全ての材料を量り終えた。次にワイアドはボールに室温で柔らかくなつたバター70gを入れ、ヘラで崩すようにミコトに言つた。ある程度ほぐれて来た所で彼はミコトに泡立て器を手渡し、クリーム状に練り混ぜるよう指示した。

それから彼女が抱えるボールにグラニュー糖40gを加え、更に解きほぐした卵半分を、混ぜ合わせペースト状になつて来た所に、先程ふるつておいた薄力粉とコーンスターチを加えて、粉っぽさがなくなる程度に軽く混ぜ合わせた。

「いいですね、きつと美味しいクッキーが出来ると思いますよ。」

「ほ、本当ですか？」

「絞り袋に生地を入れるのはちょっとコツがいりますから私がやりますよ。」

「す、すみません。お願いします。」

ミコトは慣れた手つきで生地を扱つウイアドの手元をじっと見つめていた。

「御上手ですわ、羨ましいです。」

「こんなものは慣れですよ。ミコト様も慣れればすぐに出来るようになりますよ。はい。」

ウイアドが手渡した絞り袋を手にしてミコトはすでに要領良く敷かれていたオープンシートの上に生地を絞り出した。しかし上手く出来ずに形が不格好になる。ウイアドは彼女の手からそれを取ると隣側に生地を絞り出して見せた。綺麗な正円を描いている。

「……綺麗ですわ。」

「まあ、慣れですよ。」

「……。」

ミコトは俯いた。黒くふさふさとした睫毛が頬に影を落とす。ウイアドは思わず目を奪われたが、気持ちを殺して彼女に語りかけた。

「どうしたんです？ お疲れになりましたか？」

「ウイアドさん、私、駄目な女ですわ。」

彼女は呟いて更に項垂れた。

「料理一つ出来ないなんて……。こんな女は殿方に好かれませんかよね？」

「いえいえ、そんな事……。それにミコト様には他の人には出来ない事が沢山出来るじゃないですか。」

「でしょうか…。」

落ち込むミコトにウィアドは優しく微笑みかけ、そうして言った。

「ミコト様はとても素敵なレディですよ。さあ、頑張つて最後まで作りましょう。料理は見栄えではありません。気持ちですよ。」

焼き上がりを待つ間、ミコトはウィアドの淹れた紅茶をソファアで啜っていた。向かいの席に座つてウィアドは彼女のそわそわとした様子を微笑ましく思つて見ていた。と同時に、彼女にこれだけ想われる主人にはやはり嫉妬せざるを得なかった。そうしてその主人が実は女性なのだ、ということをもミコトに話してしまいたい気持ちにも駆られたが、なんとか思いとどまって止めておいた。

ミコトはできあがつたクッキーを小さな袋に小分けにして最後、シールでそれらに封をした。

「そんなに作つてどうするのですか？」

「うふふ、内緒です。」

ミコトは満面の笑みでそう彼に告げた。

翌日、ウィアドはセラナの姿をして執務室の、セラナのデスクに座っていた。本日主人は秘匿の公務の為、塔には居なかったのだが、皇王が居ない事を悟られない為に、身体という器を持たない彼は、セラナに擬態し彼女の代わりを務めていた。寧ろ彼の主な仕事は皇王セラナの影武者であつて、執事のウィアドは仮の姿だった。

彼の視線の先ではミコトが、普段通りに書類を整理し、バリバリと仕事をこなしている。その姿はとも十六歳の少女には見えなかった。彼女はとても優秀である、だから幼くして主人に取り立てられ筆頭秘書官として働いていた。

まだ年若いし、自由に遊びたい年頃だろうに……と彼女を見てウイアドは思う。視線に気付いたのだろうか、彼女が不意にこちらを振り向いた。そうして少し恥ずかしそうに顔を赤らめると、徐にこちらに近づいてきた。そうして小さな袋を彼に手渡した。

「戴冠記念日、おめでとうございます。ささやかではございますが、ミコトからの気持ちです。」

彼女が手渡してきたのは昨日作ったクッキーだった。形は多少不ぞろいだが、彼女の気持ちの籠った物だ。彼女は今、セラナの形をウイアドがとっていると言う事を知らない。彼は困惑した。これを自分が、果たして受け取ってしまった良いのだろうか、と。しかしながらここでコレを受け取らないのもセラナとしては不自然極まりないだろう。

「……………ありがとう。」

受け取ると彼女はにっこりと微笑み、自席に戻って行った。

（まあ、役徳ということまで、貰ってしまったても良いですよね？）

その後、「お味はいかがでしたか？」と無邪気なミコトに問いただされて本物のセラナが困惑したとかしなかったとか、ミコトにクッキーを貰ったアスラが一ヶ月くらいほくほく顔だったとか、そう

いつのはまた別のお話し。

FIN .

SWEET SWEETS LESSON (後書き)

170度予熱のオーブンで15分焼けばできあがります。コレただのレシピじゃん？みたいなアレ。

SABER TOOTHED FOX (上) (前書き)

前半は本編と被っている部分があります。

誤字脱字は後日修正させていただきます。

とりあえず文量がおおくなってきましたので上篇をここまでとし、
中篇に続きます。

本編イステイナ <http://ncode.syosetu.com/n2866g/61/> 【新月の金糸雀】 3・3の続編です。

SABER TOOTHED FOX (上)

この街はあっさりと手に入ってしまった。

否、彼女たちが着いた時には既に住民は避難をした後で、木造の建築物なども全て燃やされた後だったのだ。南下を進める侵攻軍に恐れをなしたのか。足跡を追ってみると住民たちは生活に必要な物などを荷車などで引きながら山に入ったらしい、と言う所までは分析ができた。この街は切り立った崖の目立つ、針葉樹の生い茂る山脈の麓に扇状に広がっていた。

河川は流れていない。台地が荒い砂で覆われており水は地下に潜ってしまう。ただこの地域も一年の内の殆どが雪に覆われており、そうして砂を掘ればどこからでも水がしみ出す様な土地なので水には困らないだろう。

建物が全て燃やされている為、仕方なくユウリは軍営用のテントを兵士たちに張らせた。凍りつくような冷たい風から逃れる為にさつさとその中に入る。小屋が出来上がるまではこれで寒さを凌がなければならぬだろう。

彼女はテーブルに地図を広げさせた。その上に自分たちの進路と、そうして間諜からもたらされる合成軍の進軍位置とを書き加え眺めた。

大体諜報機関所属の自分が何で…とも思うが、ただこの前線に於いて本国に伝えるべきものとそうでないものとの振り分けをしなければならぬ、と言うのも解っていたし、何より幕僚長であるア

ダムが自分を臨時の作戦指揮官として買ってくれているのであろう……と、そう思うと何処か嬉しい気持ちもあり、自ら前線に身を置く事を課したのだ。だからこの寒さにも打ち勝たねばなるまい。そして合成軍にも……。

合成軍は彼女たちの侵攻している街から見て南方の平原地帯から競り上がるように進攻してきている。流石に自分たちの領内ともあって進軍速度は速い。ユウリは再び地図を睨んだ。彼らがこのまま進んでくるとして、自分たちがこの軍営に留まり防衛線を南方に展開するとして、第一次防衛ラインに敵が辿り着くまでに……今の進軍速度から鑑みれば早くて二日。

大軍である敵にとって一番忌々しき事態であるのは補給物資が手に入らない事であろうが、自国を背負い山脈に片側面を阻まれたこの位置では敵の糧道を絶つ事は難しい。

今から特殊部隊を編成し送らせるとして、万が一その作戦が成功したとしても今度はこちらの防衛が薄くなる。第一敵の糧道の経路が一つであるとは限らないのだ。空路の事も考えねばならない。それに、物資が付きるのを待つとして、それだつて一カ月分程は準備を整えてきているであろう。

水か……否、敵が北に近付けば近付くほどに水の補給は容易になる。氷を溶かして、あるいは地面を掘れば水に事欠く事は無い。第一あのザクセンとの合成軍だ。これまでのアルディアナ軍と違って水が弱点になるう筈が無い。

ユウリは再びテント幕の切れ目から霧に覆われた山脈を見上げた。岩肌は切り立ち所々氷がきらきらと輝いている。その様子は雄大で

穏やかであり、久々の太陽の光を拝んだこの日、軍営の誰もがいささかまつたりとした空気に浸っていたが、彼女だけはその山に微かな殺気のようなものを感じていた。

「あの山、忌々しいわね。」

彼女は誰へ宛てたでも無くただ呟いた。

（あの山… 忌々しい障害物、遮蔽物、嫌な気配： ただあの山を押さえれば…。あの山脈を押さえれば、合成軍に対して山上からの攻撃が可能になるわけだ… 森に身を潜め背後にまわり糧道を断つこともまた可能か… 何よりも恐れなければならぬ鋼鐵兵や上空からの攻撃にも強い筈だ… 砦？ ああそうか、そういう違和感なのか、ここはこの街の砦。）

彼女は思考を巡らせた。自分たちが砦に籠り戦うなどと、そんな脆弱な事はしたくないというのが本心ではあるが、しかしながらあの合成軍を前にそんな綺麗事を言っている場合でも無いだろう。

何としても合成軍を抑えなくてはならない。進軍を阻止し、彼の接触を阻む。

「御報告申し上げます。」

兵士の真直ぐな声が彼女の思考を遮った。ユウリが振り向くと、いましがた声を発した彼は一寸硬直し、そうして頬を上気させた。まだ若い。ユウリは彼に対して微笑んで見せる、すると彼は益々硬直して視線を逸らした。

「どうぞ、兵隊さん仰って。」

ユウリは手をひらひらと振って見せた。コートがやや雪に濡れたのか、肩のあたりの色が濃くなっている。ただ、他の兵士たちに比べて彼の常装には汚れが無かった。皇国からの伝令兵かもしれないと彼女は思った。

「は。自分は第三防衛基地にて任務に就いておりますフョードル上等兵であります。ユウリ様にこの書簡をお届けするようにと仰せ使わされました。」

そう言って彼は（緊張のあまり言葉の使い方がなっていない彼は）彼女に震える手で一通の封書を差し出す。封蝋の紋章を見てユウリはすぐにこの封書が誰からの物であるのか分った。

「分りました、任務御苦労。もう下がって結構です。」

彼女は言葉少なく言い、彼がテントの外に出るのを見て蝋を剥がした。赤の蝋に鳥の紋章……。それはアダムからの指令書だった。彼も彼女と同じくこの山を手に入れ、合成軍を迎え撃つ事を考えたらしい。概ねそのような内容で、たかだか避難民など扱うのは容易い、罾があるうがなんだろうが蹴散らすのに時間もかかるまい……。と彼は言っていた。虐殺しようが構わない、それは露見しない事だ。全て森に埋めてしまえとも……。

「そうね。それが普通の考え方だわ。」

ユウリは言って再び山を見た。オレンジの残光に浮かぶ黒々としたシルエツト、東の空には白く大きな欠けた月。短い昼はもう終わりを告げようとしている。彼女の心にはただ一点、晴れない物が燻っていた。アダムは彼の接触を望んでいるはずだ、ならば何故？

しかし彼女はこうも思った、「アダムは彼の従軍を知らない。」「これは姉と私だけが知っているはずだ、今のところは… 彼女は小さく首を振り全てを払拭する。

「すぐに指揮官を集めなさい。軍議を。」

彼女は入口近くに立っていた護衛兵にそう伝えた。

ざわりざわりと森が騒ぐ。それは何かを絶えているような音。疼きを内包した森の囁きは遠く近く波紋を描き、篝火を揺らしては去る。

「オナハオコ、ねえ、オナハオコ？」

篝火に揺れる影は男の物だ。彼はじつと岩の上で胡坐をかいて手の中の小さな杯を見つめていた。

「おいおい今夜は月が良い塩梅なんだ、ほうら見ろ、杯に映り込んで美しい、だからそんなにさわくなよチルタ。」

杯を一息に飲み干してオナハオコと呼ばれた男が言った。

「だってあいつ等、来るよ？」

男の傍に一人の少女が歩み寄る。彼女は男の背中に自らの頭を擦り寄せた。そうして彼の匂いを嗅ぐ。

「そうだなあ、来るなあ。」

男はそういう仕草をする少女を抱え上げ、彼の足もとに置かれた皿の上にあつた、彼が肉を喰い尽した残りである猪の骨を少女に差しだした。彼女は躊躇う事もなくそれを嬉しそうに齧る。

「どうするの？　ねえ、やるんでしょ、殺るんでしょ？」

「そうさなあ、しかしアルディアナ帝国からの親書もきているしなあ。」

「親書？」

少女が聞くと男は懐から一通の封筒を取り出した。

「この山を使わせると言う。」

「そんなのは！！！」

彼の言葉を聞いた瞬間少女は飛び退って彼の前で上半身を倒し威嚇するよつに構える。

「分かっているさ。こんな物はこうだ。」

男は少女の反応に笑ってみせると、傍のかがり火にその封筒を翳した。それはすぐに黒煙を燻らせ灰となって風に舞う。

「俺たちは常に自由でいられる、この地を守る限り。それゆえにお前に守られる。そうだろう？」

オナハオコは言つて更に笑つて見せた。炎に照らされた彼の鼻の頭は寒さで赤く皮が剥けている、それが余計に彼の屈託のない笑み

を人懐っこい印象にしていた。少女は薄い緑の瞳で彼を見つめていたが、やがて彼に倣って笑ってみせると、再び骨を齧りだした。

「あの女、香水臭くて鼻が曲がるよ。あの女を喰い殺したい。」

少女は言った。

風が奔る、欠けた白い月の光に狼の遠吠えが冴え冴えと響いた。

曇天に霧煙る山裾の朝　霧は針葉樹の冴えた緑を茫洋とさせている、ともすれば自らの前を歩く者の姿すら見失いそうだった。兵士たちの霞んだ顔を眺めながらユウリはほつと息を吐いた。深夜まで及んだ軍議の為か、またはこの霧がそうさせるのか…　彼女は一つあくびをかみ殺し顔を両手で覆った。光にあたると紫に輝く自慢の長髪も、湿気を含み重く暗い色を為している。

「あと一時間程はかかるでしょうね。」

軍議に出席していた指揮官の内の一人が呟いた。彼らは突如として現れ、自分たちのラインの上に現れた臨時指揮官である彼女に対して誰一人として非を唱える者はいなかった。理由としては様々あり彼女が幕僚長からの推薦でここに現れた事、そして彼女の諸族が諜報機関であり国に戻った時に自分たちの地位を脅かさない事、そうして彼女が優秀であり、しかしながら実際の戦闘に於いては彼らに任せるといったような彼らの自尊心を潰さない人事の巧さを持っていた事などもあるが、一番大きな要因としては彼女の類稀なる恵

まれた容姿がそうさせているのだろう。彼女が歩けば百合の花の香が舞う。彼女はこの作戦部隊に於いて一輪の花であった。

昨夜、軍議は白熱し、誰も彼もがランタンの明かりの元で火花を散らしていた。このままでも向かい打てるという者、一時撤退し二次防衛ラインと協力した上で迎え撃つという者、その間に防御結界を張り巡らせてはどうか、いやいやここは陸続きぞ大地は広すぎてどこにでも抜け道があるだろう… など。彼女は彼らに好き放題言わせていた。やがて彼らの論が収束した結論はやはりあの山を砦として、という事だった。

懸念される事も多くあったが、だが合成軍の、あの大軍に押し込まれるよりは多少の犠牲を吞んでも小さな畏等を踏みつぶしてあの地を手に入れるのが良い。都合のよい事にデータベースを検索するとラストーチ力からの俯瞰記録があった。山は見掛けは切り立ち険しいが、ルートはほぼ一本道でしかなく、その道を行けば中腹付近には台地のような部分もある。畏がある事は必至、だがそれは目に見えたも同然だった。

「戦闘準備を、霧が晴れ次第出るわ。」

彼女はたった一言、発した。

ざらりと風が木々の葉を揺らす。灰色の重たく孕んだ空はそれでも切れ目から気持ちばかりの光を投げかけた。斜面に積もり氷となった雪が鈍く反射して、瞳が焼ける。眉間に皺を寄せるオナハオコ、

彼は手に松明を握りしめじつと息を殺していた。

霧の中に殺気が充満している……雪崩のように押し寄せてくるであろう軍勢の動きを頭の中で繰り返し思い描いた。獣道も限られた岩と針葉樹のこの山で、この山を知らぬ彼らが、彼の想定外の動きをするとは思えないし、事実過去何度か逆側の斜面（アルディアナ帝国に面している）を攻められたときにだって、彼の想定は外れた事が無かった、つまり悉くを撃退してきた。そんな自負もある。

横隔膜が震えた、吐き気に似た何とも言えない感覚が彼を襲う。彼に従う山の民はもう配置に着いた、女や子供は罾を張らせた後に山腹に空いた洞穴（入口を探すのも困難であるし、中は大小様々な道が網の目の様に繋がっている）に隠れるように指示をした。

麓の街の避難民であるアウンクルは、（この山以外に住まいを持つ者達を、彼らは区別して「アウンクル」と呼んでいた。）女子供とは分けて隣の岩山の方に逃がしてやった。彼らの中に間者が潜り込んでいるかもしれないのだ、致し方ない。見張りは一応付けてやったが……それらにも危なくなったら放棄してこちらへ戻る様にチルタから命令させた。

アウンクルが見張りを追ってこちらに戻ってくる事は出来ないだろう。見張りの“彼ら”^{ホロケウ}が戻る道は罾の張り巡らされていないたった一線、人では到底歩めぬ様な獣道を進まねばならない。もちろん、こちら側から罾を排除してやれば別だ、あるいは他人を罾の犠牲にして突き進むか……しかしそんな外道を為す者がいるようであれば見張りたちには「足の一本位なら食い干切っても構わない」とも伝えてある。

既に山の男たちは方々に四人ずつになって散っている。じりじり

と松脂が焼ける音がする。オナハオコの横には一頭の巨大な狼ホロケウが伏せていた。狼はじつとして動かない、オナハオコも彼女ホロケウの前足に視線を落したままでいた。

白い吐息だけが時たま大きく煙る……霧が徐々に晴れてきたのか。雲の隙間から差し込む細い光、風に流されその筋は徐々にこちらに向かってくるようだった、光のヴェールが彼女の体を一瞬越す、強風にあおられ風花が舞った。その時俄かに狼は体毛を逆立てて立ち上がり人の言葉で言った。

「来た！」

オナハオコは松明を一度大きく振った、木々の間の氷がそれらを反射してギラリと光る。彼は松明を投げ捨てると足元に置いてあったボウガンと大弓を拾い上げ狼の背に飛び乗った。

「行こう、チルタ！」

大軍の地響きが、山を揺らした。

<<<中編に続く。

SABER TOOTHED FOX (上) (後書き)

よろしければご意見ご感想をお聞かせください。
今後の活動の参考とさせていただきます。

SABER TOOTHED FOX (中) (前書き)

中編です。

SABER TOOTHED FOX (中)

「行け。」

ユウリの静かな声が波紋のように伝わり、軍勢が腰を落として山道を伝う。彼らの前には捕虜を並べた。彼らの背を銃口で突きながら進ませる、罨を突破する為だ。本当ならば空軍に出勤を要請したい所だが如何せん、先日の侵攻で、ラストーチカ隊に調整が必要だと言う事が発覚した。(それもこれもヴァーストークの核となる宿主が“彼女”に打ち負かされたせい、LINKシステムに不調をきたした為だが…)。そうでなくても空軍の連中は矜持が高い、陸軍の急な要請になど応じようもないだろう。

(空軍が飛びまわるには地形が隆起しすぎているな、視界も悪い。最初からこの作戦は我々だけで為さねばならない物だった…)。

ユウリはそう思いなおして伏せていた臉を持ちあげた。目の前には壁の様な山岳、兵たちが蟻の様に這う姿が見て取れる。彼女は彼女の傍らにまだ控えたままにいる小隊に顎で合図を送った。彼らは彼女の合図を見て一様に頷きそして、歩兵の登る斜面とは尾根が別の山に駆け足で向かって行った。

「やっ…。」

一人呟き、彼女は小隊が駆けて行った山へ向かって両手をかざした。そうしてまるで楽団の指揮者の様に指をやや開き腕を縦に横に

と振る。

「上手くかかってくれれば良いけど。」

「すげえ地響きだ… ヴァローナ軍つてのは陸軍は主力じゃないって聞いていたけど、こりゃあすげえな、アルディアナ軍よりも多いんじゃないか？」

チルタの背から飛び降り、仲間の元に駆け寄りながらオナハオコは言った。

「へえ、大将でもびびんのかい。じゃあ俺たち何てもう震えが止まらねえさ、なあ。」仲間の一人が言った。大きな岩の割れ目に隠れた彼らはそう言っただけで顔を見合せて笑う。チルタが彼らのいる岩の上に立って麓をじっと見下ろしていた。

「どうだチルタ、様子は。」

「うん、確かに大軍だ。」

「ほう、どれどれ。」

オナハオコは一人岩をよじ登りチルタの脇に立った。そこから斜面を見下ろして、彼は身震いした。大軍勢だった。斜面に取りつく人、人、人、それらがもぞりもぞりと？きながら濁流の様に押し寄せてくる。彼は（実際には見た事は無いが）津波とはこういった感じなのだろう、と思った。しかし畏は…。

「妙だよ、オナハオコ。」

チルタが言った。

「私の同胞達（たゆうだつ）が……。」

彼女が言いかけた時、轟と旋風が吹き荒れた、彼は思わず腕で顔を覆う、木の葉や雪や小さな岩石の欠片何かが肌に掠りそこが急激に熱くなった……様に感じた、感じた熱はそのまま彼の全身を襲う、何かが変だ、何かが…… そう思っただけが顔を上げると同時にチルタが叫ぶ。

「オナハオコ！」

「?!」

彼はその光景に愕然とした。彼らの周囲を炎が取り囲んでいる。

「くそっ！」

オナハオコは岩から滑り落ちるように飛び降りた。雪の上に転がり全身に湿気を含ませる。それから未だ岩の割れ目に潜む仲間たちに声をかけた。

「お前ら、そこを出るよ！ 蒸し焼きにされる。」

「じゃあ木の上か？」

「それも燃やされるぞ、とにかく動け。各隊と連絡を取り合っただけから若い奴に女子供の安否も確認させる。まああそこは無事だとは思っがな。」

「了解、大將は。」

「〔術師〕がいる、そいつらを何とかせにゃあいかんだろうしな。」

「俺たちは最下に向かう。何かあればホロケウを使ってくれ。」
言いながらオナハオコはチルタと共に斜面を滑る様に下っていた。
先程の火は一瞬派手に燃え盛った物の雪解けの水に消されたのかあ
ちらこちらで燻るだけとなっている。チルタの足元では泥の混じっ
た雪が飛沫となって舞いあがっていた。

「なあ、チルタ。さっきのは「術師」の？ 「魔素」ってのは凄
んだな、雪も燃やしちまう。」

「……オナハオコ……は馬鹿なの？ 馬鹿の子?!」

「なんでそういう事を言うかな。」

「…先に突風が来たよね？」

「ああ。」

「あれで最初に油を飛ばしたでしょうよ、それに合わせて炎の「術
師」が発火… だから雪の上でも燃えたんだ、だから油が燃え尽き
ればそれでおしまい。」

「なるほどなあ、チルタは何でも知ってるんだなあ。」

「まあ、その分長生きしてるからね。でもそれさえ解れば大したこ
との無い「術師」が数名いるだけって思えるでしょ。」

「はっはっは、違うないねえ。」

「大将！」横から彼を呼ぶ声に、チルタは足を止めてオナハオコ
を降ろしてやった。

「お前ら無事か？」

「何この位…。」

老若入り混じった最下の兵たちが笑った。彼らが身体を揺らすと、
迷彩の為に身体に付けた枯葉や枝がカサカサと音を立てる。手にし
ているのは粗末な銃や、それすらない物たちは槍や弓などだ。

「若、見なせえ。」

初老の男が顎をさすりながら岩だらけの斜面の、更に下を指した。

「ひでえ数の軍勢だ。線ならともかく面でこられちゃあ畏もかたなしさ。」

「そうさな、奴等数と「術」を頼みにしてるんだ。だが…。」

オナハオコが言いかけた時、再び突風が吹き荒れ山が燃えた。

「怯むなよ、こんな物… 雪を味方に付けた我々には大したことはないだろう。」

彼は言い、慌てそうになる仲間を宥めた。

「もう少し近づけて、そうすりゃ発破をかけて地滑りを…。」

「オナハオコ！」

彼の言葉を遮ってチルタが叫んだ。

「水が…。」

「何だと?!」

迫りくる軍勢に見えていた物が、今や大量の水となって勢いよく押し上がって来ている。「どうなっているんだ…。」
「そういう言葉を呑みこんで彼は咄嗟に叫んだ。

「何でも良い！ 木に掴まれ!!」

「……かかったかしらねえ。」

ユウリは呟いて手を下ろした。彼女が見つめる先は山の頂、彼女の立つ位置からでは分らないが、中は騒然としている事だろう。

「雪はこれで適度に洗い流したし、後は私のミラーにどこまで引かかるか、よね。下層の罨さえ崩せば上々。」

彼女は呟いて隣の山に視線を遣った。そちらのほうは彼女の位置からでも見て分る程に蹂躪されつくされている。頂き近くの大岩からは黒煙が立ち上り……そこで何が行われているのかなど、言うも憚られる。

（我ながら最初の風と炎は良い策だったな。あれで大して力の大きくない「魔素使い」、それも火や風や……現物を扱う者達が数名いる、と思ひ込んだろうしな。私の能力はまず思ひ込ませることが重要だ。さて、死屍累々と自滅の道を辿っていただきますか。）

「ご報告いたします。隣接する山岳、全て抑えました。」

考え込む彼女に、若い兵士が駆け寄り、直立して言い放った。

「そつちは本体か？」

「いえ、麓の村の住民が殆どで。」

「だろうな……山頂が低い。いざ取られても優位性が保てる場所だ、で犠牲は？」

「それに関しては先に紛れ込ませていた者に毒殺させていたのが
で当方は… ですが妙な死体も混じっておりますよ。」

「妙とは？」

「それが、狼の…。」

「狼？」

「生きている狼も居りましたので、全て殺して吊るしてあります。」

「御苦労さま。」

ユウリは手で彼に下がる様に伝え、再び高い方の山を見た。

「やあね、もうちょっと愉しみたいのに。」

風花が、ふうわりと舞った。

(続きは後日)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4974n/>

番外短編集

2011年1月14日20時29分発行